

# 豊後キリシタンの跡をたどるマリオ・マレガ神父 — マレガ文書群の成立過程とその背景 —

シルヴィオ・ヴィータ

## 【要 旨】

サレジオ会宣教師マリオ・マレガ（1902～1978）に関する先行研究によって、同氏の伝記や関連情報などは多少明らかにされたが、現バチカン図書館所蔵文書群の成立についてはまだまだ不明な部分が多い。それを踏まえ、1920～1940年代におけるサレジオ会の来日と、宮崎・大分付近での初期活動を歴史的背景に、大分時代（1932～1949）のマレガの言動を分析する。彼はキリシタン遺跡（主として墓）を調査する傍ら、布教地の歴史に関わる文献資料を15年ほどかけて意欲的に集めた。入手経路として古書店と古物屋からの二つの筋があったようで、文書発見経緯についての記述によると、個別に手に入れた史料のほか、まとまって得られたものもあったと考えられる。1950年代初期までその文書の研究も続けるが、調査・研究を行う際、地元で複数の協力者の力を借りた。彼が集めた文書が1953年の夏ごろにローマに送られる時点で完結したものを、マレガ・コレクションと位置付けることができる。

## 【目 次】

1. はじめに
2. マレガ研究の現状
3. 来日の歴史的背景
4. 九州におけるサレジオ会の活動
5. マリオ・マレガの大分時代
6. コレクションの成立過程
7. 文書の入手経路と協力者のネットワーク
8. 今後の課題

### 1. はじめに

バチカン図書館所蔵マレガ文書群の価値については、様々な観点から考察を加えることができる。まず、アーカイブ資料として、200年近くの期間におよぶ、特定の地域を主とした、このような規模のコレクションは、海外の図書館・資料館が扱うことはたいへん稀なことである。その意味でも、バチカン図書館の既蔵資料に対して、東アジア関連の分野にいくらかの価値を付与するものといえる。そして、他の論考でも指摘されているように、マレガ文書は豊後地方

におけるキリシタンの流れについて豊富な情報を提供するとともに、より広く、民衆統制をはじめとする日本近世社会の状況を解明するためにも、価値の高い資料である。さらに、このコレクションの成立過程は、20世紀の歴史的事情を考えるのにも示唆に富んでいる。なぜなら、文書収集の裏側にある物語は同じように歴史的な意義を持つからである。このようなことから、日本における行政上の価値を失った後、200年以上の時を経てバチカン図書館に収められるにいたった経緯は一つの課題となる。本論では、現時点で分かっている限りのコレクションの成立過程について紹介しつつ、一人の宣教師による日本への知的な関わり方、昭和前期のカトリック教会の歴史などのテーマを取り上げ、国際的文脈、地域的文脈、個人的人脈の中でマリオ・マレガの業績として文書収集の背景を考えたい。

## 2. マレガ研究の現状

マレガの在日期間は1929年末から1974年にかけて、終戦直後しばらく帰国した時期を除いても、40年以上に及ぶ。バチカン図書館所蔵文書の発見は新規に属することであったとしても、それをきっかけに彼の名前ははじめて広く知られるようになったわけではない。日本研究の分野における業績が以前から周知のものであり、マレガの伝記の詳細についても幾つかの考察がすでに試みられている。特に、1938年に刊行された彼の『古事記』のイタリア語訳は、当時日本でもかなりの反響を呼んだものであり、『古事記』の欧文訳の歴史の中でそれなりの位置をしめている<sup>1)</sup>。出版元のラテルツァ社は哲学者ベネデット・クロチェを中心に文学以外の歴史・哲学関連などの書籍を主として世に出し、20世紀前半からイタリアにおいて「知」の体系を作り上げる立場にあった。マレガは同社から立て続けに1939年に『伝説と物語に見る日本』という日本の民間説話に関する著書、そして1948年に仮名手本忠臣蔵の翻訳・研究を上梓する運びとなる<sup>2)</sup>。なお、忠臣蔵の他に演劇について特別な関心を抱き、初期の『モニュメンタ・ニポニカ』に1939～1941年の間に謡曲のイタリア語訳を3本も寄稿した<sup>3)</sup>。

上記の研究活動が、実は、現在ローマのサレジオ大学に保存されている、もう一つのマレガ・コレクションの裏側にある。その大部分を占める日本江戸期以来の古い版本に対しても、以前から研究者の関心が寄せられていた。これらの図書は、国文学研究資料館において、15年ほど前からプロジェクトの責任者となった同館の山下則子教授のもとで、慎重な目録化作業が進められてきた。また、そこから、ラウラ・モレッティ (Laura Moretti) 博士 (現在ケンブリッジ大学) が率いる積極的な活動も始められ、サレジオ大学図書館蔵マレガ文庫の整理と所蔵資

- 
- 1) *Ko-gi-ki: vecchie cose scritte: libro base dello shintoismo giapponese*. Bari: Laterza, 1938. 同時代の古事記欧文訳の事情などについてKlaus Antoni, "Creating a Sacred Narrative: Kojiki Studies and Shintō Nationalism". *Japanese Religions*, 36, No. 1-2 (2011), pp. 3-30も参考になる。末に明治以来の欧文訳古事記のリストも記載されている。
  - 2) *Il Giappone nei racconti e nelle leggende*. Bari: Laterza, 1939. *Il Ciuscingura: la vendetta dei 47 ronin: studio sui testi originali giapponesi*. Bari: Laterza, 1948.
  - 3) "Akogi: Ballata in un atto di Seami Motokiyo". *Monumenta Nipponica*, 2-2 (1939), pp. 551-72. "Okina, Il Vegliardo. La ballata più antica tra il No-gaku, la più sacra". *Monumenta Nipponica*, 3-2 (1940), pp. 610-18. "Minase: Ballata No-gaku della scuola Kita-ryu". *Monumenta Nipponica*, 4-2 (1941), pp. 585-99.

料の増加へとつながった。マレガ関係の文献全てを同図書館に集めるという動きによって、彼自身の原稿、書簡類のほかに、バチカン図書館所蔵のものと同質と見られる約300件の古文書も2005～2006年にローマに渡った<sup>4)</sup>。これらはマレガ神父のもう一つの関心を物語っているが、日本キリシタンの記録や遺跡の発見・研究の観点からも、彼の名前は同分野の研究者の間で前からかなり知られていた。このうち特に、戦時中から終戦翌年にかけて刊行された『豊後切支丹史料』正・続編において、マレガが翻刻して紹介するものの原資料の所在が、一つの未解決問題として受け止められた<sup>5)</sup>。

そのような訳で、マレガの伝記についても、ある程度の先行研究が存在している。まずロバート・キャンベル（Robert Campbell）氏の2つの論考が発表されており<sup>6)</sup>、それに加えて近年に出された、モレッティ女史（2006年）、そして元パヴィア大学教授アンニバレ・ザンバルプエリ（Annibale Zambarbieri）氏（2010年）の両者の論文も参照されたい<sup>7)</sup>。それらに先立つ2002年、マレガの生誕百周年を記念したテレサ・チアッパロニ・ラロッカ（Teresa Ciapparoni La Rocca）女史の短かい紹介文と、故郷のモッサで行われた記念行事の際に、同じくサレジオ会の神父ジョヴァンニ・フェドリゴッティ（Giovanni Fedrigotti）氏が作成した原稿もある。ただし、両者は、追悼文及び回想記のような性質を持ち、特に後者はサレジオ会内に残る履歴書・報告書・台帳類などに基づいて書かれたもののものであっても慎重に利用すべきであろう<sup>8)</sup>。他に、日本語で発表された論説で、溝部脩氏の記述もマレガ伝に関する参考資料として大変有益なものである<sup>9)</sup>。

いずれにせよ、マレガ伝そのものについて詳しく論じるのは別の機会に譲り、ここでは文書コレクションの形成を中心に考えて、便宜上、略年表を作成して、本稿の末尾に収録しておい

- 
- 4) このような資料は東京都調布市と目黒区碑文谷、サレジオ会の施設に保管されていた。2005年に後者から送ったもののリストと送り状まで碑文谷に残っている。
- 5) マリオ・マレガ編『豊後切支丹史料』サレジオ会、1942年。同『續豊後切支丹史料』ドン・ボスコ社、1946年。
- 6) ロバート・キャンベル「マリオ・マレガ文庫」『文学』2-3号、2001年、34-38頁。国文学研究資料館文献資料部編「サレジオ大学マリオ・マレガ文庫所蔵日本書籍目録」『調査研究報告』23号、2002年、1-11頁。ロバート・キャンベル、山下則子編「サレジオ大学マリオ・マレガ文庫所蔵日本書籍目録（英文編）」『2005年度研究成果報告書国際コラボレーションによる日本文学研究資料情報の組織化と発信』、2006年、1-151頁。
- 7) Laura Moretti, “Il fondo Marega: contenuti, potenzialità e significati della collezione di un singolare missionario-nipponista”. *Salesianum*, 68 (2006), pp. 745-81. Annibale Zambarbieri, “Per la comunicazione culturale: un’ editrice e uno studioso italiano in Giappone”. Associazione Italiana per gli Studi Giapponesi, AISTUGIA, *Atti del XXXIII convegno di studi sul Giappone, Milano, 24-26 settembre 2009, a cura di Andrea Maurizi* (Milano: AISTUGIA, 2010), pp. 351-64.
- 8) Teresa Ciapparoni La Rocca, “Ricordo di Mario Marega (Gorizia 1902 - Brescia 1978)”. Associazione Italiana per gli Studi Giapponesi, AISTUGIA, *Atti del XXVI convegno di studi sul Giappone, Torino, 26-28 settembre 2002* (Venezia: AISTUGIA, 2003), pp. 499-502. Giovanni Fedrigotti, “Centenario della nascita di P. Mario Marega (1902-1978), per 45 anni missionario in Giappone (1929-1974)”. 2002 未刊原稿。
- 9) 特に、溝部脩「マレガ師のプロフィール」『アルゴノート』16、1985年4月、6-7頁を参照されたい。マレガ文書を求めての同氏の活動はバチカン図書館所蔵文書群発見の大切な「前史」ともなっているが、それについては、溝部脩氏の一連の報告が一読に値する（「マレガ文書を求めて」『アルゴノート』13、1984年7月、6-7頁および「マレガ文書を求めて 失敗の巻」『アルゴノート』14、1984年11月、6-7頁）。

た。なお、伝記的な考察に当たっては、文書収集をより広い文脈のなかに置く目的で、前記の先行研究を参考しながら別の資料で補う必要もある。なかでも特に重要なものは、マレガが近親者に向けて（初期には両親に、後年には姉妹に）定期的に行った約200通の書簡である。これらのコピーはモレッティ女史がマレガの遺族から譲り受けたとのことで、他の関係資料と同様に、現在サレジオ大学図書館に保管されている。執筆の時期は、ちょうど在日期间に対応し、いくらかの重大な空白期間（戦時中および臼杵に居住していた1950年代の頃）はあるにせよ、このような私的な側面を含む資料は、人間マレガの内なる感情に近づく上で役に立つ。書簡は多い時でひと月に2～3通書かれており、その記述からは、若きマレガが日本での暮らしに慣れ、九州で布教の歴史に詳しくなり、地方だけでなく全国的にも人脈を形成し、東京に滞在した時期には日本社会に対する考えを変えたことなどがわかる。また人生の後半には、自らの若い頃の記憶を詳しく記したことで、その過程を追跡することができる。他に日記らしきものは現在のところ発見されていないが、これらの書簡全体を日記の代用と見なしてよいだろう<sup>10)</sup>。

さらに、1930年代以降マレガの活動を取り上げる新聞記事も大切な補助資料となる。碑文谷カトリック教会、調布のチマッティ資料館、サレジオ大学図書館に、日本の地域や全国的なメディアから切り抜いたものが多くあり、それらが手がかりとなるが、他にもマレガ関連のニュースやインタビュー記事などを発掘することが期待される<sup>11)</sup>。同じく第二次資料の性質を持つものとしては、長期にわたって日本サレジオ会の中心的な存在であった、ヴィンチェンツォ・チマッティ (Vincenzo Cimatti) 師の書簡・日誌・メモ書き、そして彼が著した同会の日本布教史<sup>12)</sup> と、マレガより先に大分に入り、同じく日本で宣教活動に携わったアンジェロ・マルジャリア (Angelo Margiaria) の回想録<sup>13)</sup> によってマレガの足跡をたどることができる。それに合わせて、大分の専任司祭としてマレガの後を継いだジュセッペ・フィグラ神父の、戦時中の時期を扱う回想の中から、他に見られない情報が得られる<sup>14)</sup>。さらに、碑文谷に断片的に残る

10) 書簡の複写はサレジオ大学図書館に保管されているが、以前から整理された痕跡がある。誰かの手によって番号を付けられ、書簡は時期ごとに分けられた。その作業はマレガ自身に関わったのかもしれないが、筆跡などの比較も含め、今後の一つの研究課題となる。以下、わかる範囲で日付と付けられた番号で引用することにした。

11) 溝部氏は手許に187にものぼる記事の切抜があるというが、現在所在不明となっている（溝部「マレガ師のプロフィール」、前掲、7頁）。

12) 調布市のチマッティ資料館にはヴィンチェンツォ・チマッティの関連資料と日本サレジオ会の歴史に関わる記録が幅広く保管されている。責任者のガエタノ・コンプリ神父の尽力によりチマッティの書簡類は翻刻され、ウェブ上検索、閲覧可能である (<http://sdl.sdb.org/cgi-bin/library>)。その他、必要に応じて日誌やメモから部分的に翻刻したものを提供していただいた。整理番号などは明確な区分が未詳なので、原資料からの引用は多少困難である。チマッティの書簡をベースに編纂された「自伝」はサレジオ会に関する情報源として評価されたい (Gaetano Compri, ed., *Vincenzo Cimatti: l'autobiografia che lui non scrisse*. Leumann (TO): Elledici, 2010)。日本語版もあるようだが（『チマッティ神父 本人が書かなかった自叙伝』上・下、ドン・ボスコ社、2012年）、未見である。チマッティが著したサレジオ会日本布教史として *Breve cronistoria dei primi 25 anni di lavoro salesiano in Giappone*. Tokyo, 1951 という内部資料のガリ版があり、これをベースに一般向けの本 (Vincenzo Cimatti, *Nell'impero del Sol Levante*. Torino: Edizioni A.M.S., 1953) も刊行された。

13) Angelo Margiaria, *Rampe di lancio e fiori di ciliegio*. Roma: Libreria editrice salesiana, Roma, 1967.

14) 世のひかり社編『戦争中の一神父のてがら フィグラ神父の回想 (1940年—1947年)』世のひかり

大分教会の日誌類も、当時の生の記録として参照されたい<sup>15)</sup>。日本の側からは、大分のカトリック宣教と教会に関する小冊子類が、宣教活動の地域的文脈を理解していく上で参考になる。最後に、彼の人生のそれぞれ異なる時期にそばにいた人たちや、一緒に活動した人々へのインタビューは<sup>16)</sup>、オーラル・ヒストリーの観点から、マレガの肖像に歴史的経緯や彼自身の人格について枠組みを与えることも可能にしている。

### 3. 来日の歴史的背景

言うまでもなく、マレガが日本に来たことはコレクション形成の第一の前提である。したがって、歴史的背景を明確に把握する中で、文書収集の決定的な期間に焦点をあわせ、その事情と経過などについて考察していく。

19世紀後半にイタリア北部、ピエモンテ州を最初の拠点にして誕生したサレジオ会が、1927年に九州地方の一部を宣教区に任されることになった。それは、1905年末に日本を訪れたオコンネル教皇使節以来、教皇庁及び当時の布教聖省（Sacra Congregatio de Propaganda Fide）の方針が転換し、その時まで半世紀以上独占的にフランスの外国宣教会（Société des Missions Etrangères）がカトリック布教を託された日本へ、他の修道会を積極的に入り込む動きの一環として位置付けることができる<sup>17)</sup>。そのような選択は、布教スタイルの多様性による効果を狙ったものである。異なった国籍の宣教師が来日することになったが、サレジオ会の場合はイタリア出身の人物が主力となっていた。信仰に関わる問題だとはいえ、19世紀の世界秩序の中でアジアにおけるフランスの外国宣教会は同地域における国の存在感とも関係していたようなので、1920年代になっても、サレジオ会の派遣は駐日フランス大使を務めていた詩人ポール・クロデルが国益の観点から気にするほどのできごとでもあった<sup>18)</sup>。

いずれにしても、サレジオ会員の来日は、周到的な準備期間を経て、1926年のはじめごろに実現する。これは、上記の日露戦争以後の日本布教政策の転換の流れだと理解すると同時に、教皇ピウス11世在位の時代（1922-1939）に展開された活発な海外布教奨励運動の結果でもあった。日本に限った動きではないが、教皇庁のそのような方針はレオ13世の時代（1878-1903）から始まり、ベネディクトゥス15世（1914-1922）による、Maximum illudというラテン語の

---

社、1994年。

- 15) 日誌の断片とともに報告書の下書きらしきものがファイルされている。Cronaca della casa di Oita（大分教会日誌）というタイトルが付けられ、1930年代から40年代にかけての記録のようである。溝部氏が取り上げる10巻本からなる日誌の完全版は貴重な参考になるはずだが、今のところ見つからない（前掲、溝部脩「マレガ師のプロフィール」、6頁）。
- 16) 2012年から2015年にかけてサレジオ会司祭、フェデリコ・バッジョ（Federico Baggio）、溝部脩、ガエタノ・コンプリと、戦時中大分で文書解説などでマレガを助けた橋口日出子さんに対してインタビューが行われた。そのオーディオ・ファイルも、個人の記憶によるマレガ像に迫る手立てとなる。
- 17) 山梨淳「二十世紀初頭における転換期の日本カトリック教会—パリ外国宣教会と日本人カトリック者の関係を通して」『日本研究』第44集、2011年、221-304頁。
- 18) Zambarbieri、前掲論文、351-52頁。クロデルの在日期間は1921年末から1927年2月までであるが、1925年1月からほぼ一年間休暇で帰国。ちょうどサレジオ会の来日が検討され、最終的に決まった時期に当たる。

言葉を冒頭にある、有名な「使徒的書簡」(1919)がその発端とも見なされる。同年に日本という国家に対して外交活動も並行して開始される。大使交換を伴う国交ではないが、「使節」(apostolic delegate)という形で1919年からバチカンの代表を東京に駐在させ、日本のカトリック教会や外国人宣教師を保護、指導する立場を非公式にでも持ち合わせる意図が目立つ。それ以後、使節は現地に関する詳しい情報を発信する拠点ともなる<sup>19)</sup>。

一方、以上のような背景は、サレジオ会自体の積極的な動きとも噛み合う。会の最高指導者である総長 (Rector Maior) フィリッポ・リナルディ (Filippo Rinaldi) の在職期間は1922～1931年で、ピウス11世と時期はほぼ一致している。この人物のもとで1920年代を境にサレジオ会は第2期の海外布教を成し遂げる。実に、1925年はサレジオ会の宣教師が初めてアルゼンチンに渡って50周年に当たり、そして、同時に、その年は聖年でもあった。聖年を機会に盛大な万国布教博覧会がバチカンで開かれ、その前代未聞の盛大な様子は人口に膾炙した。なお、翌年の1926年には、サレジオ会の本拠地トリノでもまたサレジオ会宣教50周年記念展が開催されている。その2つの展覧会も、表象のレベルで会の日本進出に大きな刺激を与えたとも言えるだろう。いずれにせよ、1926年のサレジオ会宣教師団の来日には、そのような記念する意図もあるが、バチカンや日本側の上記の事情を考えると、うまく時代の要請に応えたものであると言っても過言ではない<sup>19)</sup>。

#### 4. 九州におけるサレジオ会の活動

サレジオ会の宣教師団が門司港に入ったのは1926年2月8日であった。一行は合計9名、フランス出身の1人を除いて全員イタリア人の司祭であり、団長のヴィンチェンツォ・チマッティは、それ以来戦後にかけて日本におけるサレジオ会の大きな原動力で、特に九州における初期活動の中心人物であった。管轄地域としては宮崎と大分を与えられた。そこには以前から宮崎・大分・中津に宣教師の拠点があり、これらを中心に活動を展開する。派遣までの経緯についてはガエタノ・コンプリ (Gaetano Compri) 氏の論考を参照されたいが、それによると、現存の記録に基づく限り、サレジオ会のメンバーを日本に送る動きは、1923年までさかのぼることができる<sup>21)</sup>。布教聖省の計画はカトリックの人口が最も多い九州地方を様々な修道会に割り当てることにあり、フランス人のコンバ長崎司教、そして事前に下見に送られたサレジオ会の代表や駐日バチカン使節のマリオ・ジャルディーニ氏 (Mario Giardini, 1922-1931駐日) が熟考した結果、長崎教区下の宮崎・大分両県はサレジオ会の手に渡ることになった。ここでも教皇使節の役割が明らかになるのだが、ジャルデーニ大司教もイタリアの人であり、初代教皇使節

19) この諸事情については、オリビエ・シブルの解説は最も詳しい。Olivier Sibre, *Le Saint-Siège et l'Extrême-Orient (Chine, Corée, Japon) : de Léon XIII à Pie XII (1880-1952)*. Rome: Publications de l'Ecole Française de Rome, 2012を参照。

20) そのような記念の意図は教皇ピウス11世が出発前の謁見において主張したのもであり、当事者の意識には根強くあったようである。Gaetano Compri, "The Beginning and the Development of the Salesian Work in Japan", in Nestor C. Impelido (ed.), *The Beginnings of the Salesian Presence in East Asia*, Associazione cultori storia salesiana: Hong Kong, 2006, vol. 1, p. 68.

21) Compri, op. cit., pp. 63-65.

のピエトロ・フマゾーニ・ビオンディ（Pietro Fumasoni-Biondi, 1919-1921駐日）、後任のパオロ・マレラ（Paolo Marella, 1933-1939駐日）も同様にイタリア人であった。フマゾーニ・ビオンディは、その後布教聖省秘書官（1921～）と長官（1933～）を歴任した人で、最近の研究によって明らかにされているように、特に子弟格のマレラとの関係も有効に活かし、布教聖省と日本の太い繋がりを作り上げた。日本の事情、布教の成果と困難、在日宣教師の活躍について直接に報告を受ける立場にあった<sup>22)</sup>。

いずれにしても、1926年の初めごろ九州に入ったとはいえ、サレジオ会の創立者が、バリ宣教協会の司祭たちより宣教地を譲られるまで、言語や環境などに慣れるための準備期間として1年ほどを要した<sup>23)</sup>。独自の活動を始めたのは、実質1927年の2月から3月にかけてである。それ以降の諸事情については、チマッティ氏が来日25周年を機会にまとめた報告書に詳しいが、1928年の3月にサレジオ会の宮崎宣教区は長崎教区から独立し、チマッティ氏を主任として信徒の指導を心がけ、独自のネットワークを構築し始める。チマッティなどの書簡類や報告書が伝えているところによると、宮崎・大分の貧困状態や、当時の日本の物価高が活動のもっとも大きなハードルになっていたことが分かる。それに対して、地元社会に根を降ろす試みは注目に値する。マレガの後の活動を考えれば、日本における当時の布教方針は布教聖省や駐日使節も含め、広く共有されていたことは重要な要素である。チマッティも特に教育活動に力を注ぐとともに、有力者との付き合いにも積極的に取り組む。行政当局の要人を招くイベントなどを定期的に企画し、近代社会に於けるメディアの重要性も見逃さない<sup>24)</sup>。信徒の日常的な指導以外、以上のような活動も合わせて考えれば、財力の問題は一つのネックにもなっており、それぞれの宣教師は故郷の身内や知人からの仕送りで活動費を補うことがままあった。マレガ・コレクションの成立について資金源の問題を解明するにあたり、その書簡にもあるように、仕送りの背景も念頭に置くべきであろう。

その後、教育機関の設立や出版活動などもあって、サレジオ会は1930年代を境に東京にも広がり、戦後になって大阪にも拠点を持つことになった。そのようにして、会の中心は地方から大都会に移ったが、最初の宣教地との繋がりとは決して薄いものにならなかった。マレガやサレジオ会の第一団のメンバーの1人、アンジェロ・マルジアリア神父の九州と東京にまたがった行動もその事実を物語っている。もともと教育レベルが高いと認識されていた日本で、まさしく教養主義の時代の真っ只中では、教育者や知的な人材は必要であるとして、はじめからの要請であった。読み物を通してカトリックの教えを広めるために、もともと大分で誕生したドン・ボスコ社による出版活動も、その中の重要な1コマとされているとともに<sup>25)</sup>、後に相次ぐ教育機関の設立も、日本におけるサレジオ会の歴史を形容するようなものでもある。ただし、一般

22) 1922年から始まった九州地方の分割について Régis Ladous, *Le Vatican et le Japon dans la guerre de la Grande Asie Orientale : la mission Marella* (Paris: Desclée de Brouwer, 2010), pp. 78-81. 同書はマレラの役割に詳しい。ジャルディーニ、フマゾーニ・ビオンディなどによる教皇庁使節の外交活動については Sibre、前掲書を参照。

23) Compri, op. cit., pp. 73-77.

24) チマッティ「自伝」(Vincenzo Cimatti: l'autobiografia che lui non scrisse)、前掲、pp. 131-132。Compri, op. cit., p.79も参照。

25) ドン・ボスコ社については Zambarbieri, op. cit. が詳しい。

社会に対する布教の問題はともかく、1927年から1928年にかけて一人歩きをし始めた宣教師グループは、別の意味でも教育者を必要としていた。それは、1年ぐらい遅れてマレガと一緒に加勢した3人の一部も、そしてチマッティがその1ヶ月後ぐらい、1930年1月末に一時帰国して日本に戻った際、同伴した7名の若い神学生も、司祭になるために必要な教育課程をまだ終えていないものも入っていたからである<sup>26)</sup>。これは、10代の若者は言語習得の面で有利な年齢であるなどという戦略的な選択に基づくものであるが、教皇による20世紀布教のガイドラインに従い、もっとも望ましい現地出身の司祭を養成するためにも教育者の資格は必須の条件であった。

## 5. マリオ・マレガの大分時代

マレガも上記のような先駆者たちの1人である。1902年に元ハプスブルク帝国の領地であったイタリア北東部、ゴリーツィアの近くに生まれ、日本に来た時は、ほんの10年ほど前に「イタリア人」になったばかりの27歳の若い司祭であった。サレジオ会の第一団が宣教地の地盤固めに動き始めた頃、第三グループの一員として、1929年12月14日神戸に上陸する。船上で書いた複数の書簡が旅程の詳細を伝えており、そして1929年のクリスマスは宮崎で過ごしたことも同じく書簡から分かる<sup>27)</sup>。そこから1974年に日本を離れるまで40年以上在日生活が続くが、文書コレクションの成立時期において注目されるのは、大分にいた時代である。

後述の考察にあるように、文書が1953年8月もしくはその少し前に日本を出たとしたら、その収集の下限は、マレガが東京を後にして新任地の臼杵に向かう(1958年末まで在住)1953年6月上旬もしくは中旬頃とみてよいだろう<sup>28)</sup>。実際、キリシタン弾圧の実態を伝える史料を集めた時期が大分に在住した時期と重なり、その間に現在バチカン図書館所蔵の同類の史料を何点かローマに送っており、そのような史料を対象にした研究活動も目立つ<sup>29)</sup>。また、キリシタン史に関する学術論文が相次いで世に出るのも、『豊後切支丹史料』が刊行されるのも、この時期に集中している。なお、現時点で調べた限り、1953年以降バチカンに古文書が渡った形跡

- 
- 26) 人数についてチマッティの1930年の日誌(Cronaca)は少し分かりにくい。宣教師の「第三団」とされるものはマレガなどの3名と、自分が後から同伴した若い人も含めて10名となる。それに、マレガ一行と一緒に日本に渡ったシスターたちは6名もいた。総勢は16名である。日誌はアルフォンソ・クレヴァコレ(Alfonso Crevalcore)神父が写した未刊原稿による。マレガ書簡2(1929年12月4日)と、チマッティの「自伝」(*Vincenzo Cimatti: l'autobiografia che lui non scrisse*同上)95頁も参考になる。
- 27) 書簡4(1929年12月25日付)、書簡5(1930年1月11日付)。モレット女史は(前掲論文、748頁)マレガが1929年内に日本に到着していなかったのではないかと疑うが、このような資料などをともに、来日の確実な年月日が分かる。
- 28) 当時の駐日バチカン代表の秘書官による1953年8月14日付東京発の書簡(バチカン図書館デリオ・プロヴェルビオ氏によって最近口頭発表で紹介されたもの)及び新出マレガ自筆の文書目録はこのような結論に導く。これについては後述する。
- 29) “Memorie Cristiane della Regione di Oita”, *Annali Lateranensi*, 3 (1939), pp. 9-59; “E-fumi”, *Monumenta Nipponica*, 2-1 (1939), pp. 281-86; 「豊後切支丹の書簡に就て」『歴史地理』79-6 (1942)、52-57頁; 「臼杵第十四、第十五代藩主に關する文献」『歴史地理』82-1 (1943)、32-37頁; “Documenti sulla storia della Chiesa in Giappone, gli editti di persecuzione del 1619, testi e note critiche”, *Annali Lateranensi*, 14 (1950), pp. 9-59.

はない。後掲の略年表では、マレガの「大分時代」を、第二次大戦を挟んで1期と2期に分けたが、それは1932年から1949年までで、2年ほどの不在期間（1947～1948年）を除き、約15年を意味する。以下、この時期について概略的に紹介する。

マレガは最初の約2年間宮崎にとどまり、宣教師養成に関わる教育の仕事において哲学と神学を教えている。生徒は上記の若者で、合計8名であった。マレガとチマッティも含め、1930年の彼らの生き活きた姿を写した写真が残っている<sup>30)</sup>。翌年（1931年）、宮崎の神学院が近隣の高鍋に移転したが、1930年から1931年までの書簡から、この宮崎・高鍋時代にはマレガ自身の学習の様子も窺える。日本の理解に努める中、異境に対する最初の見識で、日本人を「面白い連中 (bei tipi)」と好意的に受け止め、新しい文化の諸相については、時にはちょっとした挿絵（下駄などの見慣れないモノの類）も交え、定期的に両親に報告している。来日してから間も無く、1930年にはすでに日本語も習い始めて、大正時代の国定教科書とでもいうべき『尋常小學國語讀本』、いわゆる第3期國語讀本の一冊を教材として使ったようである<sup>31)</sup>。当時の日本人小学生向けの教科書を丸暗記する、現代の外国語教育では受け入れない方式で学習したにも拘らず（「テキスト置換」と彼は述べている<sup>32)</sup>、それからたった5年後の1935年（12月4日）に、日本神話に関する本を完成させたと知らせていることは、驚嘆に値する。これは明らかに『古事記』の翻訳を指しているが、1933年にはすでにその作業に取り組んでおり、イタリアで出版することまで模索されていたのである<sup>33)</sup>。

いずれにせよ、大分における「新たな人生」が1932年の1月頃から始まる<sup>34)</sup>。このような記述は、マレガが期待していた実際の宣教活動のことを意味しているであろう。大分の主任として以前からそこに駐在していたアンジェロ・マルジャリアを補佐する形になった。マルジャリアはドン・ボスコ社の設立者でもあり、出版事業が1934年の末に東京に移ったのを機に、1935年4月からマレガが大分教会の主任を受け継ぐ。チマッティが言うように、その後1946年まで、「大分の宣教師」という渾名が付くほど、布教の仕事とは直接関係ないことも含め、地域との密接な関係を築き上げていった。彼の付き合いの流れについては、書簡などのような資料を頼りに詳しい情報を整理する必要があるが、頻繁に取り上げられるのは、教育・報道・警察関係と、本人いわく地元社会に深く入る目的で近付いた武徳会大分支部の弓道部門のメンバーたちであった<sup>35)</sup>。

警察との付き合いも、時代の状況を考えれば、当然重視される。実にその当時はカトリック教界にとって風当たりが強い時期であった。内村鑑三の不敬事件がきっかけとなった思想的な

30) Cimatti 自伝、92頁。

31) サレジオ大学ドン・ボスコ図書館所蔵。

32) 書簡6（1930年3月16日付）。Compri, op. cit., pp. 74-75。子供に立ち返る方式は共通。

33) 書簡62（1933年9月3日）。

34) 書簡40（1932年1月24日付）。大分教会日誌（前掲手書き原稿、註15参照）によると、1931（1930年は誤記）年12月9日にマレガが大分に移った。書簡38（1931年12月付）と書簡39（1931年12月21日）も合わせて参照。

35) Cimatti, *Nell'impero del Sol Levante*, cit. pp. 149-50. マレガと弓道については「弓をひく心境—マレーガ博士を打診」という、興味深い新聞記事がチマッティ資料館に保管されている。どの新聞か、何年のものか不詳。チマッティの日誌（1939年2月11日付）には大分教会訪問を記述している中で、医者、将軍、新聞記者、裁判官、校長などの地元要人がマレガを囲む風景を伝えている。

反発まで遡らなくとも、周知のように、カトリックを取り巻く2つの事件が1930年代の前半から中ごろにかけて起こっている。1933年から奄美大島のカトリック信徒に対する排撃運動が始まり、その問題は外国人宣教師に対する強烈な批判や世論扇動に結びついた形で1934～1935年に展開された。それに先立ち、1932年には上智大学学生の靖国神社参拝拒否問題も話題となり、両方の決着には、マレガと関係が深かった教皇庁使節パオロ・マレッラの功績が大きい<sup>36)</sup>。奄美大島問題の解決とも関係するかもしれないが、1934年、東京に赴任して1年しか経っていないマレッラが鹿児島に下り、続いて大分も訪問したことでマレガの活動に注目したと思われる<sup>37)</sup>。マレガの書簡には、このような情勢について所々言及があり、不安に満ちた記述も多い。1936年初めの「回覧書」では、宣教師排撃運動が前年に激しく行われたことを仄めかしながら、大分ではそれほどのものでもなかったことも伝えている。この背景を考えれば、彼自身の古事記翻訳が異彩を放っていたとしてもおかしくない。出版が実現するまであと数年あったとしても、同回覧書によれば1935年の9月から自分の業績はラジオや新聞に報道され、メディアのスポットライトを浴びるようになったとある。その時期に、外国人宣教師が日本精神の本質を伝えるものとして意識されていた聖典を、国際的に紹介することの意味は大きい。そして、宣教師はそのような役割も果たせるということで、マレッラはじめのカトリック側の高評価や日本外務省の支援、国際文化協会の助成金が下りたことも筋が通る<sup>38)</sup>。

文書の収集も主として大分時代に行われたと述べたが、上記のようなマレガの研究者としての知名度も大いに助けになったと思われる<sup>39)</sup>。任地の大分は、マレガも絶えず主張しているように、かつての豊後としてザビエル以後キリシタンの盛んな地域であり、シンボリックな価値が高い。彼がそこで、その過去について調査・研究を行う最初の動機は、殉教者の記録を世に伝えることにあった。そして、2つの異なるアプローチ、すなわち文献資料と考古学的な証拠の両方から、キリシタンの姿を解明するための資料を何年にもわたり掘り起こし続けた<sup>40)</sup>。このような活動は戦時中大分が空爆されるまで(1945年7月17日)やめなかったようであるが、空襲の1週間後、マレガを含む九州の外国人宣教師は全員熊本県南阿蘇村の栃木温泉に移動させられ、戦争終結までの約1ヶ月間、そこにとどまった<sup>41)</sup>。そのあとの経緯は、資料によって正確に把握することが多少困難だとしても、1946年にはマレガが東京にいることが多かったこ

36) 奄美大島を含めた一連の事件に関わる問題については高木一雄『大正・昭和カトリック教会史』1、聖母の騎士社、1985年を参照。その上、1932年以後の制度面などとの関連において Hans Martin Krämer, *Untedrückung oder Integration? Die staatliche behandlung der katholischen Kirche in Japan, 1932 bis 1945* (Marburg: Förderverein "Marburger Japan-Reihe", 2002)も参考になる。マレッラの役割についてはLardous 前掲書が最も詳しいのだが、Olivier Sibire, "Le représentant pontifical, informateur privilégié du Saint-Siège, l'exemple du délégué apostolique Paolo Marella à Tokyo (1933-1949)", in Pettinaroli, Laura (ed.), *Le gouvernement pontifical sous Pie XI, pratiques romaines et gestion de l'universel* (Rome: École Française de Rome, 2013), pp. 171-190も参照されたい。靖国神社参拝拒否問題に関しては、Kate Nakai, "Coming to Terms with 'Reverence at Shrines': The 1932 Sophia University-Yasukuni Shrine Incident", in Bernhard Scheid (ed.), *Kami Ways in Nationalist Territory: Shinto Studies in Prewar Japan and the West* (Vienna: Austrian Academy of Sciences, 2013), pp. 109-153を参照。

37) Lardous, op. cit., pp. 168-169.

38) 『カトリック新聞』昭和13年5月21日付記事。Zambarbieri, op. cit., p. 360も参照。

39) 以下取り上げる、1948年のインタビューでは本人もそのように説明している。本稿161頁参照。

40) Quadernetto e documenti sulle tombe. Articoli di giornale.

とは、ほぼ間違いない。宣教拠点も失い、その年に東京のドン・ボスコ社から『豊後切支丹史料』の続編が刊行されることも、その理由として考えられる。その事實は、没後にステファノ・デッル・アンジェラ（Stefano Dell'Angela）司祭が遺族に宛てた手紙によっても立証される<sup>42)</sup>。

その後、1948年にマレガは、イタリアから帰り大分へ戻るが、1年ほど経ってまた東京によび戻される。その事情に関する考察を現段階では避けておくが、研究活動と資料の整理を継続したい願望はあったようだ。1952年の書簡のなかで、もしも1950年より後に大分に戻ることが許されるならば、史料集の3巻目をまとめたという趣旨のことを述べている<sup>43)</sup>。だが、大分に戻ることなく、臼杵に派遣され、そして1959年にまた東京に移るように命じられる。1974年までの間、晩年のマレガは、大都会の環境や日本の戦後社会に疑問を抱きながら、神保町あたりで古書籍の収集にふけり、学術的な興味を別の方向へ向けていく<sup>44)</sup>。それでも、大分との繋がりを断ち切らず、赤羽の星美学園短期大学で教員生活<sup>45)</sup>の合間に、冬休みと夏休みには九州下りが定番となっていた。それはまず大阪でサレジオ会の施設に泊まり、10年近く続いた修二会の研究のために奈良へ立ち寄る<sup>46)</sup>。そして、大阪から船で九州に渡り、別府か中津あたりで休暇を過ごすというパターンであったが、大分の海や自然について、東京の街とは対照的に、情緒溢れる描写を書簡に託した<sup>47)</sup>。臼杵では多少史料やキリシタン墓の発見に携わりはしたが<sup>48)</sup>、1953年にコレクションがバチカンに移されてから、東京時代も含め、そこにいた期間には多量の文書収集はしなかったようである<sup>49)</sup>。

## 6. コレクションの成立過程

コレクション形成の上限は、バチカン図書館のデリオ・プロヴェルビオ（Delio Proverbio）氏が探し出したバチカン側の資料と、2015年9月の調査時に発見されたマレガ自筆の手記によって1953年の6月ごろだと定めて差し支えないだろう。その成立過程及び収集方法については細部まで明確なイメージを得られなくとも、さまざまなマレガの言動や、その他の資料にある情報を参考にして、現段階でもかなりのことが解明できる。

まず、収集はいつ始まったかという問題について考えてみると、これは意外と早い時期からであった。両親宛の葉書が残っており、消印の部分が破損して日付がないが、書簡を整理した

41) 書簡129 (1967年9月26日付)。

42) カミッロ・メデオット (Camillo Medeot) 宛て書簡 (1983年1月8日付)、M. Doc. 24. メデオット氏はマレガの妹オフェリアの夫であり、マレガとも度々文通している。

43) 書簡104 (1952年7月付)。

44) 書簡123 (1966年12月1日付)。

45) マレガと一緒に日本に渡った、サレジオ会系のシスターが経営していた。

46) 修二会について、マレガが自分なりの解釈をしていた。「修二会の行法と西アジア・原始キリスト教の儀式」入江泰吉『お水取り：入江泰吉作品集』三彩社、1968年。

47) 書簡140 (1969年6月10日付)、174 (1972年8月11日付)、175 (1972年8月17日付)。

48) 『大分合同新聞』1955年1月14日 (臼杵市下北津留井ノ村西、キリシタン墓を発見)、1955年1月19日 (阿南家の古い系図を発見)、1955年7月21日 (臼杵市下北津留字道安、「地下礼拝堂」を発見) など。残念ながらこの時期の書簡は1通も残っていない。

49) 現在サレジオ大学所蔵の僅かな資料の位置付けだけが課題として残るのだが、その由来とバチカンの文書群と関連性について今後の調査の結果を待ちたい。以下、註61参照。

人物が、大分に移ってからわずか1年後の1933年2月のものだと断定している。内容から2月に書かれたことは間違いなく、文通の前後関係からもその可能性は極めて高い。その中でマレガは次のように報告している。

大分の近くにキリシタン墓を他にも見つけました。これは仏教寺院の中で。キリシタン弾圧時代の墓、合計185基でした。殉教者や背教者に関する古文書を数多く購入することができました。何千もの文書であり、私の部屋は満杯です。1635年のものです。私は常に古い書物、書簡や文書に囲まれ、あるいは墓を探し歩いています。その成果については地元新聞に報じてもらっています。チマッティ師は常に、ローマに手紙を書きなさいと言ってくれていますが、それをする時間がなかなか見つかりません。何しろ新しいことが絶え間なく出てくるからです<sup>50)</sup>。

このように、キリシタン弾圧の記録に対して、初期から2種類の調査に従事する彼の姿が見取れる。この葉書の内容が1933年の初め頃であれば、文書収集の上限は1932年までに据えてもいいかもしれない。短い間に文書が何千点に達している事実に驚くが、それらは全て1635年、つまり寛永12年のものであるという発言については、今後考察する余地がある。あるいはマレガの言葉は、彼がスペースの問題を考え、簡略にまとめるつもりで多少誇張したものになったとも理解できる。いずれにしても、文書をバチカンに結びつけるための糸口を見つける必要があったが、それもチマッティ師の助言によって、すでに当時に存在していた。だが、時間がないと言いながらも、バチカンへの経路が現実的に見つかるまでには、それほど時間がかからなかったようである。

実に、1938年、初めてその史料についてラテラネンセ博物館（バチカン博物館の前身）の機関誌『アンナリ・ラテラネンシ』(Annali Lateranensi)に「大分地方におけるキリスト教の名残」というタイトルで詳しく報告している<sup>51)</sup>。この論文は、文書の何点かをローマ字表記で翻刻してイタリア語訳で紹介され、初めて本人によって「マレガ・コレクション」ということばも使われている。正式に誕生したコレクションは、史料に整理番号まで付いており、すでに整理されている状態であったことが分かる。その上、自分が所持している文書を翻訳する意を表明するとともに、そのいくつかのサンプルをバチカンに寄贈したことも明らかにしている。その一つを殉教者の記録としてチマッティ師に預け、同師は「1938年にイタリアへ持って行った」ともいう。文書の入手経路については後ほど改めて考えるが、ここではひとまずその由来について端的に説明したい。以下は「臼杵の城」から出てきた、稲葉家の文書であり、他の藩の行政文書の現存状況から比べると、特異な事情だと考えていだろう。保存状態についても

50) 書簡 57bis(1933年2月か)。“Ho trovato altre tombe cristiane presso Oita, in una pagoda. In tutto erano 185 tombe del tempo delle persecuzioni. Ho potuto comprare molti documenti antichi sui martiri e sugli apostati. Sono migliaia di documenti, che mi riempiono la camera. Sono del 1635. Sono sempre in mezzo a libri vecchi, a lettere, a documenti o in cerca di tombe. I risultati li faccio pubblicare dei giornali locali. Mons. Cimatti mi dice sempre di scrivere a Roma, ma non trovo il tempo. Saltano sempre fuori cose nuove.”

51) “Memorie cristiane della regione di Oita”, *Annali Lateranensi*, 3 (1939), pp. 9-59.

次のように言う。

大名が失脚する度にその保存記録の一部が失われた。臼杵城のものはそれと違い、大部分が我々の時代まで伝わった。嘆くべき唯一の痛みは、虫による損害、ネズミが疵つけたもの、そして管理人の家の子供がしかけたイタズラによるものである。彼らは文書を紙くずとして習字の練習に使っていた。帳ものの中には全く読めないものもあるが、完全な形で残った多くのものから弾圧の段階をいくつも探ることができる<sup>52)</sup>。

要するに、1932～1933年以後5年ほどの時を経てコレクションは増加し、1938年には番号付きのまとまったものとして存在していた。そして、『豊後切支丹史料』の二巻が世に出るまで、戦時中を通して10年ほどかかったが、ちょうど10年後の1948年、イタリアにしばらくいた時期に、マレガの日本キリシタン史料の研究家としての評判は完全に広まっていたようである。その時に30分ほど教皇ピウス12世との謁見もあり<sup>53)</sup>、この文書収集も話題になったことは想像に難くない。同年、『宣教青年』（Gioventù Missionaria）というサレジオ会系の広報誌に対してインタビューに応じた際、活字になった史料集二巻を教皇に贈呈したところであると言及している<sup>54)</sup>。記事の見出しが「重要な発見」（"importante scoperta"）となっている通り、インタビューの中心テーマはマレガの新出文書であった。その中で、文書について有意義な情報が色々と伝わる。見出しの横にある趣旨概要には、マレガが数ヶ月前からイタリアにいること、日本殉教者に関する大切な史料を発見したこと、そして筆者にそれを見せてくれたことが記載されている。1948年にイタリアに渡った時、サンプルとして持ち帰った複数の文書のことである。文書（インタビューの場で見せたものについてもかもしれない）の年代については、最後の弾圧のものとし、期間は1660～1672年だと指摘する。おそらく寛文年間のことであろう。発見の事情については簡単なことばで片付けている。

別に大した話ではありません。長年同じ町（大分）にとどまっていたので、多くの人と知り合うことができました。私が布教の歴史に関心があると誰もが知っていたので、1870年まで大分地方を支配していた、封建君主の記録文書が保管されていた家を教えてくれた人がいたのです<sup>55)</sup>。

---

52) "Ogni volta che un damio veniva spodestato, parte degli archivi andava dispersa; l'archivio del castello di Usuki, invece, giunse in gran parte fino a noi; gli unici guasti che si devono deplorare sono i danni del tarlo, i guasti prodotti dai topi e le marachelle dei ragazzi della famiglia del custode, che usavano i documenti come carta straccia per gli esercizi di calligrafia. Alcuni registri sono illeggibili; dal molto però che ci rimane intatto possiamo seguire con sicurezza alcune fasi della persecuzione." (20頁)

53) 書簡171 (1972年4月21日付)。

54) "Ora ne sto preparando la traduzione".

55) "Nulla di straordinario. Essendo rimasto per parecchi anni nella stessa città (Oita), ebbi modo di fare molte conoscenze. Tutti sapevano che mi occupavo della storia delle Missioni. Vi fu chi mi indicò la casa dove si conservavano gli archivi dei principi feudali, che avevano governato la regione di Oita fino al 1870". (8頁) 大分の地元社会との付き合いについてマレガ自身が興味深くまとめているが、それについては別の機会に譲るしかない。

これと似たような説明が、モレッティ女史も引用している英文の「手紙」にある。文章は同じく1948年のものであり、そこでは稲葉家のことには言及していないが、古文書は殉教者、絵踏みなどと関係し、その数は5000点以上であると述べている<sup>56)</sup>。モレッティはほかにも多くの資料を紹介したが、中でもマレガ自筆の未公開原稿は注目に値する。これは「発見」についてさらなる詳細を伝えている。

そのようなことで、ある日、弓道家の一人（毎回集まるメンバーは250人ほどいた）が、昔の武士の末裔にあたる人が記録文書を処分したいと言っていることを知らせてくれた。そして、その家の場所を私に示した。ためらうことなくそこに駆けつけた。多くの人は名人の署名が付いた書簡を探していた。[...] 私は [文書を] 車一台分自動車に積んだ<sup>57)</sup>。

入手方法の課題は後で取り上げるが、以上の資料からまとめてみると、注目すべき事実は1938年の時点ですでにコレクションが成立していること、それは稲葉家の文書からなり、5000点以上もの資料を含んでいること、そして1948年に発見した経緯を加えていることであろう。ただし、上記の葉書の内容と照らし合わせてみると、この話の通り即座に、バチカン図書館所蔵の文書群が一まとめとして発見されたという結論には達しない。

実は、コレクション形成の背景については、前述した新出資料も手がかりを提供してくれている。小型のノートでマレガ自身が作成した文書の目録であり、それが入っていた封筒の上には、「未加工木製長持」(baule di legno semplice) 内にある文書に関するものであると丁寧に記されている。1953年8月付で、東京ローマ法王大使館の秘書官が、当時国務長官を務めていたジョヴァンニ・バッティスタ・モンティニーニ (Giovanni Battista Montini、後の教皇パウルス6世) に宛て、マレガ文書を送ったことを通知する書簡には、荷物は「未加工木製長持」、「メッキ内装の長持」、「木箱」と3個であるという。さらに、「未加工木製長持」中の文書はすでに目録が作成済みで、番号も付けているということと、一方のメッキ内装のものは目録がないのだが、史料を分類して類別に紙袋に入れ、その内容は袋に明記されているとも伝える。なお、木箱はメッキ製の小箱（原文は「引き出し」としている<sup>58)</sup>）を2つ収容しており、その中にマレガ師の著作に関わる別の文書が入っていると結ぶ。

これは文書群が送られた時の状態を復元するのに重要な手がかりとなるが、自筆の目録はその一部を対象としていることが分かる。ノートの表紙には1938年と書かれているので、それは最初に目録を作成した年に違いない。その時まで集めた文書の全てか、または一部をマレガがある基準によって順番に整理したのである。中表紙や別紙にもメモ書きが残っており、そこか

56) Moretti, op. cit., pp. 750-51 (M. DOC 8)。

57) “Così, un bel giorno uno degli arcieri (ad ogni adunanza vi erano circa 250 soci) mi avisò che un discendente degli antichi samurai voleva disfarsi dell’archivio; mi indicò la casa ove potevo andare a vedere i documenti. Corsi là senz’altro. Molte persone cercavano le lettere con le firme di personaggi importanti. [...] ne caricai un’automobile”. (Moretti, cit., p. 765) M. DOC 114。

58) cassette (木箱) となるべきところはcassetti (引き出し) となっているが、これはミスプリントか筆者の単純なミスと見る。

ら長持内に紙袋がいくつあって、それぞれ何番から何番まで何が入っているか細かく記されている。それによって、整理の基準が何であったかが分かると思われる。だが、1938年以後もリストが何回か加筆された形跡があり、特に1943年に再チェックしたという鉛筆のメモ書きが所々に見える。そればかりか、文書の分類も試みられ、それぞれの内容についてまた簡単な解説を加えるので、このノートの周到な分析がまず必須の課題となる。なお、すでに手放して寄贈した史料があれば、いつ、どこに渡ったかと、そして刊行物（学術雑誌だけではなく新聞も含め）に公開したものについても筆録している。

また、前述のように、マレガが中表紙に文書収集の上限とみなすべき正確な日付をつけた文章を書いたことも注目すべきである。「マレガ・コレクション」を封じる直前であろうが、彼は以下のように述べている。

文書は、1870年以後、白杵藩「大名」専用の家のクラ（防火のため、土壁で窓のない建物）にあった。その家は現在の図書館の近くに所在していた。古いものを売るように仕向ける古物商たちに家の管理人はこっそりと幾つかの文書の塊を売ったはずである。そのようなことで文書は古物屋の売りに流れてしまった。私は古物屋のお店で見つけた。大分で。1953年6月10日 マレガ記す<sup>59)</sup>。

明らかに日本キリシタンの記録をローマに送る際、荷物を整理して文書の入手について語ったものである。バチカン図書館所蔵史料の概要調査が終われば、それらが1953年に送ったものと一致するかどうか最終的に確認できる。言い換えれば、マレガ・コレクションは1953年以後増加していないと確実にわかるのである。しかし、その後もわずかながらヴァチカンに送ったものがあつたようだが、文書ではない。例えば、1年後、1954年にまた教皇庁大使館を通してコレクションの整理番号を加えた『豊後キリシタン史料』の第一巻を届けている。そして、1957年には島原の乱に関する版本を送ったという通知書が残っている。それ以外、何かがバチカンに渡った証跡はなく、マレガ・コレクションは1953年以前にできたとみてもほぼ間違いないであろう<sup>60)</sup>。2005年まで調布市のサレジオ会施設にあつた約300件の古文書はこのコレクションの一部であり、何らかの理由でマレガが取っておいたのか、それとも文書がバチカン図書館

59) "I documenti erano in un kura (edificio senza finestre, con pareti di fango, contro gli incendi) della casa riservata al daimio di Usuki, dopo il 1870. La casa era vicina alla biblioteca attuale. Il custode della casa dovette aver venduto, alla chetichella, vari mucchi di documenti ai rigattieri che solleticavano la vendita di roba vecchia. Così i documenti finirono sui banchi dei venditori di roba vecchia. Io li trovai in un negozio di roba vecchia, a Oita. 10/VI/1953 Marega." 「白杵藩「大名」専用の家」とは、明らかに、現在も白杵市立図書館のそばに所在している旧稲葉家別邸（現稲葉家下屋敷）のことを指す。ただし、マレガ氏の認識と違い、これは1902年に建てられたものであり、正確な流れのルート（古物商の名前など）まで突き止められるかどうかは今後の研究に譲るほかない。稲葉家文書や別邸の蔵のことについては、詳しくは平井義人『「稲葉家文書」の伝来と移動—県立資料館による史料収集事業の一事例という視点に立って』『史料館研究紀要』第2号、大分県立先哲史料館 1997年3月、18-38頁（特に20-21頁）を参照。

60) 1953年より1年ぐらゐ遅れて送った荷物は別である。これはバチカンではなく、トリノのサレジオ会本部に渡った。中身は今のサレジオ大学にあるものの一部かは不明だが、少なくとも書籍はサレジオ大学の今のマレガ文庫の中核であると思われる。ほかに展示品のようなものもあつたよ

に入ってから新たに集めたのか、これらの位置付けは今後の課題として残るであろう<sup>61)</sup>。

## 7. 文書の入手経路と協力者のネットワーク

大分で集めた史料は、ある時点で東京に渡った。そのあと、バチカン図書館が受け取るまでの経緯は以上で見てきたが、どのような経路でマレガが多量の文書を手に入れ、どのように戦火を逃れて東京へ移すことができたかを問う必要がある。この経過についてもまたはっきりしたエビデンスが乏しい中、明らかになっている事実もかなり認められる。

戦時中、コレクションが大分の空襲による被害を受けなかったのは、マレガの妙案の結果であるらしく、それについて最近、東京チマッティ資料館のコンプリ神父の指摘があり、チマッティの日記を確かめてみると、1944年7月15日付でマレガが書籍などを宮崎に移動させたという記述に行き当たる<sup>62)</sup>。その時期にマレガの下で働いていたジュセッペ・フィグラ (Giuseppe Figura) 神父が、その回想録に「白杵のキリシタンの資料」も含まれていたともある<sup>63)</sup>。おそらく空爆よりほぼ1年前にしたその行動が、マレガ・コレクションを救ったのだろう。いずれにせよ、藩領を運営する過程で作成された行政記録を、市場で入手することは比較的簡単であったようで、ゆえにマレガはコレクションを何年にもわたって増やし、1932年あたりをはじめとして、10年から15年ほどの期間で今に近い形になったことは明らかである。その上、前掲の資料は文書の入手の経路についても示唆している。

まず、文書の相当な部分を購入したことは疑う余地がない。おそらく大分の古物屋で、元藩主の蔵から出てきたものがマレガの手に渡った以外、個別に何点か古書店から入手していたものがあると読み取れる。推測の領域を出ないが、最も早い時期には後者が主流であったのかもしれない。いずれにしても、この2つの入手方法が並行して行われことは、調査中見つかった、長崎と大分の古書籍商が作成した何件かの領収書にも裏付けられる。またマレガが1938年ごろ入手した書物や文書のリストが残っているが、その詳細については、大分県立先哲史料館の佐藤晃洋氏が『史料館研究紀要』第19号に発表した報告を参照されたい<sup>64)</sup>。なお、このような事

---

うである。Cimattiの書簡を参照。溝部氏との記憶に照らし合わせ、整理する必要がある。

- 61) これらの一部は、2001年に大分県立先哲史料館企画展『豊後キリスト教史』のために、サレジオ神学院から一時的に大分県立先哲史料館に借用され、そこである程度の整理作業も施された。その際に撮影された写真データは同史料館に保管されている。
- 62) チマッティ、日誌1944年7月2日。「マレガ師は自分の持ち物(書籍、博物館のための物品)を宮崎に置く」(“D. Marega mette a Miyazaki le sue cose, libri, materiale per musei”)
- 63) 「昭和19年(1944年)の終わりから20年(1945年)の始めにかけて、空襲はいよいよはげしくなってきました。[...] マレガ神父さまは、白杵のキリシタンの資料を持っていました。「あれは爆撃でやられるのは惜しい」といって、一週間もかけて、全部箱におさめて宮崎に送りました」。(世のひかり社編前掲、15頁)。ただし、フィグラ神父の記憶では時期が少しずれている。さらに、別の箇所には「[...] そして二日後には、また別府に自転車で行きました。というのは、空襲がひんぱんになったので、マレガ神父さまの持っていたキリシタンの資料を、安全な場所に移すためでした」(24頁)ともあり、キリシタン資料をどこに保管すればよいのかという、当事者の懸念を雄弁に物語る。
- 64) 「マレガ・プロジェクトに係る平成25年度概要調査」『史料館研究紀要』第19号、大分県立先哲史料館 2015年1月、38-40頁。

実は、戦時中『豊後切支丹史料』を編集する際、古文書の解読でマレガを手伝っていた橋口日出子さんという女性による口頭での証言内容と一致する。彼女によれば、マレガのまわりの人々が書店や骨董商から古文書を見つけ、それを彼に見せに行っていたとのことである。つまり、マレガが言う「古物屋」と古書店、2つの経路があった。

終戦直後イタリアへ渡った時期に、表向きには購入したことを明かさなかった理由は不明だが、何らかの事情があったか、単純に話を装飾したとも考えられる。しかし、その発見の経緯はサレジオ会の他の神父の間に伝承されていた様子も見られる。カンベル氏がとったクロドヴェオ・タッスィナリ神父（Clodoveo Tassinari, 1912-2012）の証言は、「異伝」を伝えている。それによると、1930年代マレガが大分の市役所か図書館あたりを歩いていたところ、職員が古い文書を捨てようとしているのを見かけ、一括でもらったのだという。それが偶然にもキリシタン関係の記録であった<sup>65)</sup>。マレガが言う元藩主の屋敷が図書館の近くにあったことを考えると、その伝承のひとつの源流が垣間見える。チマッティの豊富な資料の中には、マレガの研究活動に言及する箇所も多々ある。しかし、彼が古い文書研究に耽っていることを取り上げてはいても、その入手経路については何も語っていない。とはいえ、コレクションの中で、一括に手に入れたものがないとも言えない。これもまた調査の結果を待つのみである。

また、これだけの文書を集め、その一部を翻刻・解読と研究までしたことは個人の才能だったとしても、決して一人の力でできるものではない。実際、文書群の成立の背景にはマレガ自身も前掲のインタビューで述べているように、周りに協力者のネットワークがあった。前記の橋口日出子さんがその一人であるが、マレガにつながりのある人々の存在は、史料集成の謝辞の部分にも見出すことができ、また彼が複数の勉強会的な集会に参加していたことの証拠や、この時期に関連した地方史の記述からも確認されつつある。そのような事実を考慮に入れると、バチカン図書館所蔵の資料もまた、この協同的な事業の産物なのである。

文書収集の過程においては（そしてキリシタン墓の調査においても）、特に赤岩藤三郎という人物が協力者として様々な所から出てくる。前記の橋口さんは、同様に大分のカトリック幼稚園で働いていた、別の女性の親類であると記憶し、そうした活動をとりわけ熱心に行っていたのが赤岩だったと指摘する。チマッティ師も1937年2月6日付の日記に「我がマレガ師はカテキスタ赤岩と一緒に研究を続けている」と伝えている。事実、この赤岩氏はサレジオ会の大分布教の初期からいろいろな場面で力になっていたようである。マルジアリア氏も思い出話の中で、赤岩について少しユーモアのあるエピソードを交えながら、かなりのスペースを割いている。長崎の古いキリシタンの子孫だということで、長崎あたりの古書店との繋がりもあったこの人物との関係は一つの糸口となるだろう<sup>66)</sup>。

## 8. 今後の課題

以上、マレガ・コレクションの背景について一通り述べてきたが、これらは今後検討すべき

65) Campbell 1.

66) Margiaria, op. cit., pp. 95-96. 『一粒の麦地に落ちて—大分カトリック教会創立百周年記念誌』、前掲には赤岩の写真が掲載され（45頁）、甥の赤岩日出男の回想も見られる。

ものの方向づけにもなるであろう。そもそも、布教地の歴史研究に取り組むことはチマッティ師の指示によるものであった。それは大分に移って職務の一面としてチマッティが位置付けたようであり、本人の人柄を考え、それはマレガに最も適した仕事だという判断であろう。史料を集めるもう一つの目的は、あくまでも弾圧の記録を通して殉教者の名前を伝えることにあった。だが、そのいわゆる宗教的な動機の裏に、彼自身の個人的な気持ちも読み取ることができる。研究は、厳密な意味で布教活動とは矛盾しているかのように受けとめており、それに打ち込むことは自分の「エゴイズム」であると（おそらく、彼は調査を行うことに個人的な快楽を覚えていたのだろう）、家族に宛てた書簡で自己を責めている箇所が見られる。それとともに、それらの行動を正当化する動きも見える。個人的には学問の成果を上げることでイタリアにいる父親を喜ばせ、聖職者の道を選んだ際に失望させた親戚に対する一種の恩返しにもなると仄めかす<sup>67)</sup>。だが同時に、この活動により学問的・文化的な場における権威を獲得し、宣教師としての自分が地域社会に溶け込んでいくための力が強化されることも意識していた。チマッティ師も繰り返し主張しているように、そのような活動はむしろ宣教師が現地社会（特に知識人の世界）へ深く入り込むのを大いに助け、布教のためにも好意的で戦略的な選択のひとつであった<sup>68)</sup>。

また、このような発想からは、古文書を集めたことはどこまでマレガの個人的な事業であったのかという素朴な疑問も生まれてくる。これには、サレジオ会だけでなく、もっと広い意味で、日本カトリック教会及び教皇庁使節との関わり方について今後考察する必要があるだろう。ただし、文書を購入するにあたり、マレガが自分の個人的な資金をつぎ込んだことはほぼ確実である。布教支援の目的で親戚などから募金活動の結果、イタリアからの仕送りが度々あったことは書簡からも分かる。さらに語学講師もしており、その収入で文書を買うことは十分に可能であったように思う<sup>69)</sup>。このような問題については、書簡の中に直接の手がかりを見出さずとも、サレジオ会関係者は常識的にそのように推測していいだろうという。だが、マレガの人格的な評価を考えてこの調査・研究活動が彼の性格や人柄に最も適したのものとして認めており、チマッティ師の手記にもあるように、会は絶えずサポートを欠かさなかった。例えば、『豊後切支丹史料』を出版するための費用は個人の負担ではなく、サレジオ会の出版活動の中に位置付けられる。また当然のことながら、パチカンとの関係づくりにおいても、マレガの仕事は会の日本での成果の一つとして紹介されている<sup>70)</sup>。

一方、研究活動だけでなく、ローマに文書を送ることに關しても、早い時期からマレガの仕事のことを知っていた、上記の教皇使節パオロ・マレラ（後に枢機卿となる）の配慮も想像

67) 書簡99 (1938年2月12日付)。

68) 書簡92 (1937年1月2日付)、98 (1938年1月付)。註35も参照。

69) ラテン語、ドイツ語などを教えていた(書簡66、1934年1月10日付、69、1943年6月14日付参照)。戦後も、別府大学(当時、別府女子専門学校)で同じくラテン語、ギリシャ語を教える。学長になった佐藤義詮はフィグラ神父の回想録に所々登場もし、後年にそのような思い出話を綴る(『読書懐古 マレガ博士のこと』『アルゴノート』10、1984年11月、2頁)。

70) 日誌 1932年2月8日付。チマッティ師はマレガに布教地(大分)の歴史研究をすることが職務でもあると指示する。『豊後切支丹史料』続編の費用についてイタリア大使館の助成金もあったようである。同上、1944年5月5日付を参照。

することができる。マレッラは、1933年から1948年のあいだ日本に駐在しており、近年彼に関する研究も盛んに行われ、非常に重要な時期に、教皇庁と日本の関係において中心的な役割を担ったことが明らかになってきた。このことから、マレッラとマレガのつながりについては、その詳細を跡付けるためのさらなる調査が必要である。マレガのいくつかの書簡から、両者のあいだには親密な関係があったことがわかる。一方、マレッラ及びその側近たちは日本キリシタンの歴史研究について熟知しており、研究・調査を支援する目的で、さまざまな機会ですら自分の名前を出している<sup>71)</sup>。たとえば、1937年に出版された『大村藩古切支丹研究資料』にも彼の序言が掲載されており、その意図はマレガのそれに極めて近いものであった。

あと一つ残される課題として、次のようなこともあげられる。1920年代から1930年代には、キリシタン関連の文献や資料の主だったコレクションができて上がる時期でもある。その時代には多くの知識人は、長いあいだ忘れられていた日本と近代初期のヨーロッパとの文化的接触に関心を抱くようになり、それは当時、日本人の歴史的ルーツに対する一種のエキゾチックな趣味のようなものにもなっていた。こうした観点から、広く読まれた新村出の論文やエッセーとの関連も考えて、芥川龍之介の小説に含まれる切支丹物の物語が大衆的な人気を得たことについて言及するのは容易だろう。また、宗教研究および日本人キリスト教徒の観点からは、姉崎正治の仕事がマレガによる調査の時期に並走している。マレガは姉崎の「迫害」に関する研究についてよく知っており、豊後史料について、自分の仕事は姉崎博士を補足する側面もあると1938年の論文の中で間接的にも言及している。このような広い視野のなかでこそ、マレガという人物には適切な位置づけが与えられるのであり、彼の歴史研究の成果の価値もまた、十全に認めることができるであろう。

---

71) 例えば、書簡150（1970年8月24日付）参照。

## マリオ・マレガ (1902～1978) 略年表

### 1902—1918 幼少年期

- 1902年9月30日、モッサ (ゴリツィア市) に生まれる。
- 1918年、第一次世界大戦の戦況をうけてウィーンに移住。当地にあるサレジオ会の寄宿学校でギムナジウム最後の学年 (5年生) を終える。
- 1918年11月24日、大戦終了後すぐにステイリア州南部ヴェルンゼー [Wernsee] (現在はスロベニアのヴェルジェイ [Verzej]) にあるサレジオ会の修練院に入る。

### 1919—1923 イタリアでの教育

- トリノ (ヴァルセリーチェ) とラ・スペツィアで高等教育を受ける。
- 哲学の学位を取得。

### 1927—1929 イタリアでの司祭職と教職

- 1923-26年、トリノ (クロチェッタ) で神学を学ぶ。
- 1927年、叙階 (リグーリア州サヴォナにて)。
- リグーリア州のラ・スペツィアとヴァラツェにて教師となる。初期の書簡では、九州とリグーリア州の気候をたびたび比較している。
- 1929年10月23日、27歳の時、ベネチアから日本に向けイタリア船ヴィミナーレ (ロイド・トリエステーノ) にて出港する。船上から家族に宛てた書簡が数通ある。

### 1930—1931 日本 (宮崎)

- 1929年12月14日、5名のイタリア人修道女とともに神戸に到着。
- 1929年12月16日、合計10名の一団は宮崎に到着。
- 宮崎神学院にて教師となる。
- 1930年11月4日、同学院が宮崎から高鍋の新校舎に移転。彼は高鍋に約1年滞在し、その後、大分に移住する。

### 1932—1945 大分時代 (第1期)

- おそらく1931年12月、大分に移住。
- 1932年1月、そこでの「新たな人生」が始まる (1932年1月24日付書簡)。
- 1935年4月1日より、大分教会の主任となる (1946年まで。チマッティ著「25周年の歴史」を参照)。
- 1935年頃より、出版準備中の古事記の翻訳によって有名になる。同書は1938年にイタリアで出版される (日本全国紙の記事など)。
- 戦時下において、橋口日出子氏が文書の書き写し作業の手伝いをしている。
- 大分が爆撃される。宣教活動は崩壊 (1945年7月17日)。
- 1週間後、彼を含む九州の外国人宣教師はすべて熊本県南阿蘇村の栃木温泉に移動する。彼らは戦争終結までの約1ヶ月間、そこにとどまる (1967年9月26日の書簡)。
- 原爆投下から約2ヶ月後の広島を目にする。
- 1946年、出版物や講演会の一覧を含む彼の仕事に関する報告がなされる。
- 『豊後切支丹史料』正・続の2巻本が出版される (1942年と1946年)。
- 1945年末ごろ東京へ移動。1946年、そこで過ごすか。

### 1947—1948 アメリカとイタリアへの旅

- 当時の交通の事情もあり、アメリカ経由でイタリアへ一時帰国。

- アメリカで大分教会などを再建する目的で資金も募る（宣教仲間のマルジャリア氏も1930年代に同様の目的でアメリカを旅している）。
- ゴリツィアに帰郷する（親戚に会い、また何回かにわたり講演も行っている）。
- ピオ12世に接見する。
- ベネデット・クローチェに会う。
- 発見した文書についてのインタビューを受ける。同インタビューは『青年宣教 (Gioventù missionaria)』24号、1948年に掲載（複写をローマのサレジオ大学が所持）。

#### 1948—1950 大分時代（第2期）

- 1949年、別府で教師となる（新しく開校された別府女子専門学校か。同校は、その後すぐに別府女子大学となり、現在は別府大学となっている）。謝金の領収書が、パチカン図書館の文書のなかに見つかっている。
- 1966年12月1日の書簡で、同大学が発行している雑誌の記念号に寄稿するための論文を準備していると述べている。

#### 1950—1953 東京（第1期）

- 大分に戻る希望を忍耐強く持ち続ける。
- ついに、新しい宣教拠点が開かれる予定の白杵に派遣される。

#### 1953—1958 白杵時代

- 1953年夏（6月？）より、白杵に滞在。
- その期間親族に宛てた手紙はない。理解しがたい空白。
- 白杵に建てられた新しい教会についての新聞記事がある（同記事は、現在もなお碑文谷所蔵文書に含まれている）。
- 新発見のキリシタン遺物について新聞記事がある（同記事も、現在も碑文谷所蔵文書に含まれている）。

#### 1959—1974 東京（第2期）

- サレジオ会の聖ヨハネ・ボスコの修道女たちが運営する、東京赤羽の星美学園にて教師となる（彼が1929年に日本に来たとき、この修道女たちの最初の5名の集団と一緒にだった）。
- 1年に1回か2回（春休みと夏休み）、大阪と奈良を訪れ、そこから九州（大分の別府と中津）にも訪問する。
- 奈良のお水取りに関心を抱く（聖週間に行う儀式が影響していると考えられる）。
- 奈良の東大寺の僧侶たちと交友関係を結ぶ。
- 「1ヵ月に3回」、東京神田の古書店を訪れる。
- 日本において東方学会に定期的に参加する。

#### 1974—1978 イタリアに帰国

- 1978年1月30日、ブレシアにて逝去。

